

2020年代の建築をとらえる言葉

アイデンティティの象徴 |

LGBTQ運動の再燃やBLM、そしてコロナの長期化によるバーチャル世界の活性化などを背景に、世界的にアイデンティティに関する言説が強まっている。欧米ではフェミニズム・クィアイズムなど多様なイズムを建築の言説と絡める姿勢が活発化し、そこから新たな美意識が生まれている。異質扱いを受けるアイデンティティは、新たな「象徴」を要し、それらを産出する。マジョリティへの一般的な機能が重視されてしまう建築設計の世界において、「象徴」を機能性の呪縛からの解放の概念として用いられないか。独自性のある「象徴」を世の中から見出すこと、それらを新たに創出する能力が、近未来の建築家にとってかけがえのないスキルとなる。

(上野有里紗)

遊び | margin

施工の現場でしばしば、遊びがねえなこの納まりは、などと職人さんに窘められることがある。頭の中で組み立て、部材と部材の接点をゼロ距離で納めた計画は、間違いなくそのままでは実現しない。寸法的な余裕を持たせ、気を抜いて良いところは気を抜いて作り、仕上げるところはきちんと仕上げる。日本の木造建築の、天井だとかあるいは化粧と内部構造＝野物の関係は、つまるところそんな遊びをどこに仕込むかの配置の妙である。息の詰まった生活から、なにやら虫食い状の空白が生まれ出しているかもしれない、の直感だけがある。その空白を再び何かで埋めて充足感を得るか、それとも、空白を空白のまま取っておく心の余裕＝遊びを持つか。今わたしたちはそんな岐路に立っているのではないだろうか。

(佐藤研吾)

移動 | movement

語義：人が移動すること

コロナ禍において世界各地で実施されたロックダウン(外出禁止令)に対し、イタリアの哲学者ジョルジオ・アガンベンは強い懸念を示した。この様な移動の自由に対する制限は戦時中ですら誰も思い付かなかったものであり、「近代国家の自由主義に反する」と非難したのである。この主張は移動の自由が数ある自由のうちの単なる一つではなく、近代が権利として確立してきた数々の自由の根源にある自由だという考えに基づいている。

確かに外出禁止令や自粛要請によって移動が制限されることで、その他の数々の自由(営業の自由、人と会う自由、教育を受ける自由など)が自ずと制限されてしまうことに、我々は身をもって気付かされた。

移動の自由は我々の営みの根幹を成している。コロナ禍の制限によってこの極めて単純な事実を再認識できた今こそ、「人が移動すること」の根源的な意義を見直し、そこに生まれる空間体験に新たな豊かさを見出す機会ではないだろうか。

(池田健太郎)

インスタ アーキテチャー | Instarchitecture

背景として自撮りされ、SNSにUPされる建築。今まで自分と切り離して対象化して眺めていた空間を自己の背景として取り込み、さらにSNSで発信するという新しい「生きられた」建築の在り方。空間は体験され、シェアされ、視覚情報としてタイムラインで大衆の目にさらされ、イイね!が押されさらに拡散されるというダイナミズムを形成する。

Instagramは「Instant Telegram(インスタント テレグラム)」を略した造語で、「Instant」は「瞬時」、「Telegram」は「電報」という意味がある。

すぐにアクセスできる「手軽な」建築空間のイメージにより、わたしたちは実際に過ごして体感する空間の本質を見失ってしまうかもしれない。一方で一般の人たちが建築を身近に感じ、「建築と社会とのつながり」を強化するきっかけともなるだろう。

(吉池葉子)

カービング | Carving

塊状の材料をCNCルーターで削り出す手法。切削加工が容易な木質系材料の他、コンクリートや樹脂なども対象とする。ルーターは自走式の軽量な機械で、センサーで座標を特定しながら、入力データに基づいた自由曲面を削り出す。加工エリアの寸法制限はなく、例えばCLTの極厚板両面からの曲面の削り出しや、柱と梁・床面との接合部品の削り出し等が可能。また現場での加工が出来るため、現場で巨大な木材の塊から洞窟のように空間を削り出すことも可能である。この技術により、木材利用の需要の向上が見込まれる。また災害時には、山間部等で大きな資材の運搬が出来ない場合に、現地に小型の機械を送り込み、材料を現地調達しながら加工し、建物を補修することが出来る。

(荒木美香)

外包 | ex-inclusion

建築の大半、そして空間の概念は、「内包」する論理で組み立てられていないだろうか。一つの建物や世界感となって場に落とし込まれていくわけだが、多種多様な事象を扱う「建築」の可能性はそれくらいなものなのか。内外関係なく環境自体を変えることができるもっと壮大な創造行為が建築であることを信じている。だから多用してきた「内包」という概念を一度捨てて、「外を包む→外包」へと頭の使い方をシフトして存在しない言葉の意味を、設計しながら考えている。でも位相幾何学的な内外反転や内部論理をオープンエンド化する形態操作に陥ることでは決してない。だから内観から外観へただシフトするという意味でもない。では地面と接する外壁なのか。もしくは敷地に建物を建てた際に余る外構にその対象は眠っているのか。近代が築いた多様な表現の先は設計対象にしていない。

(増田信吾)

書き換える建築 | Architecture for rewriting

新型コロナ禍とともに始まった 2020 年代、自然災害が多発し、地球規模で取り組まなければならぬ環境問題も臨界点を迎えている。一方で、AI、IoT、VR など新技術が実用化され、2027年にはリニア中央新幹線が開通する。生活のあり方や働き方が見直され、環境との向き合い方が問い直され、新技術がこれまでのスタイルを刷新する。建築は、ただ施主の要望に応じて建てられるのみならず、それが前提としてきた建築を取り巻く様々な事象のあり方を問い直し、書き換えることまでもが求められているように感じる。成熟化した末に複雑に絡み合い全貌の見えない社会の回路の一つ一つを紐解き、その関係性や仕組みを書き換え新たな社会を切り開くような建築こそが 2020 年代を象徴すると考える。

(米澤隆)

共在可能性 | coexistability

人新世と叫ばれるように、現代において人間の活動は惑星規模で影響を及ぼすまでになった。ティモシー・モートンが「ダーク・エコロジー」と提唱するように、もはや純然たる状態としての自然(あるいは人工物)は存在しない。ハイパーオブジェクト(人間が生み出した、人間的スケールを超える物質)のようなものを含め、人間的・非人間的なものがあらゆる次元で入り混じっている中で私たちは生きている。2020年にはコロナウイルスが猛威を振るい、私たちは生活のあり方について選択を迫られた。この選択は、ワクチンの普及によって状況が再び変化した時に、再度迫られるだろう。今、従来とは異なる環境観が求められている。私たち自身、そして私たち以外をどう認め、同じ空間に存在することができるかが問われている。

(両川厚輝)

グラデュアリズム | Gradualism

グラデュアリズムとは、建築的实践を通して漸進的に着実な社会改良を目指す建築家の立場や主張を指す。主に東日本大震災以降、建築を通じた社会課題解決が着目される中で活動を始めた建築家に見られる特徴である。彼らは単体の建築を作るだけでなく、建築を支える普遍的なシステムの構築とその規模拡大を図ることによって、建築の量的な問題の解決を目指している。現在、気候変動の問題はもちろん、人口減少に伴う余剰空間の増加、熟練工の減少など建築を取り巻く環境は急激に変化している。こうした急速な変化と社会のリズムを調停するために、次世代の建築のあるべき姿へと漸進的に移行させるような実践がますます求められている。

(谷繁玲央)

気・築 | Designing Atmosphere

「気(atmosphere)を構築すること。すでにそこにあって、気づきにくいものを建築を介して現すこと。」昨今続く世界的な疫病によって、私たちは見えないがそこにあるものを警戒し、「場、人、空気を含む総体」に意識的になったように思う。こうした変化をむしろ前向きに捉えてみる。ある風景を目にした時に、そもそも日本では、気象、季節、明暗の変化のように、五感で捉えられる情調としての雰囲気重視されてきたと言われる。このように時間軸を持った移ろうもの、かたちのないものを掬い上げ、手がかりにした設計を考えてみたい。一例として、地方在来線の駅の隣に計画した葬祭場を挙げる。ここでは時折訪れる電車と踏切音を背景に、太陽と共に移動する屋根からの光がお見送り空間を照らす。故人が遠くに去っていく中、環境の音と光によって遺族に寄り添う空気感が醸成される。

(百枝優)

※『建築設計』掲載時は補足説明と写真も収録予定

後悔空地 | Disappointing space

昨今、公共空間の利活用や再開発などに注目が集まる中で、都市再開発事業等の公共貢献施策で整備された公開空地に着目している。

公開空地そのものは、目新しいものではなく、都心居住の改善策の1つとして、様々な法改正を繰り返しながら整備されてきた。設計時の建築概要書では、都市空間の魅力を向上させる設計思想について、上位計画等と整合した華々しい言葉で掲げられている。しかし、まちなかでよく見かける公開空地の多くは、そうした華々しい言葉とはかけ離れた公開空地が多いように感じる。

このような心理的に利用しにくく、残念でなんとも惜しい公開空地を「後悔空地」と名付けた。後悔は、先に立たない。後悔空地から目を背けず、より良い設えや使い方を考えることで、2020年代に生み出されていく空間を、未来に渡って後悔しないために、その一助となるような言葉として考え続けたい。

(大山宗之)

コレスポンドンス | Correspondence

制作において、人間と物の間で交わされる相互作用のこと。人間が物から学び、応答すること。人間はこれまで、素材に莫大なエネルギーを加えることで人工物を生産し続けてきた。その結果として、多くの人工物で地球が溢れかえり、自然の過剰な収奪が人間生活にも支障を来すこととなった。こうした極端な人間中心主義の修正が迫られる時代において、人間と物の関係性を再考することが求められている。とりわけ建築においては、既存の建造物や廃棄物を有効に活かす取り組みが重要となるだろう。コレスポンドンスは、制作者である人間が物それ自体から多くのことを学び、次なる制作に反映し、より良い未来を物とともに創造するためのまなざしである。

(松岡大雅)

※『建築設計』掲載時は補足説明と図も収録予定

サブネイチャー | Subnature

「自然 Nature」に「下」を意味する接頭辞「sub-」を組み合わせたこの言葉は、アメリカの建築史家デヴィッド・ギッセンによる同名の著書(★)の中で提起された概念で、人間や建築にとって理想的あるいは調和的な〈自然〉のイメージの外に位置し、ときにそれら(人間や建築)に危害をもたらすような周縁的な自然のあり方を指している。気候変動や感染症の拡大といった事態を背景として、改めて自然(及びそれとの関わり方)の問題が前景化しつつある今日、従来の〈自然〉のイメージにおいては捉えきれない「サブナチュラル」な存在を意識化し、それらに対する向き合い方を考えさせるという点で示唆的な言葉であるように思う。

★ David Gissen, *Subnature: Architecture's Other Environments*, New York: Princeton Architectural Press, 2009. 同書では「サブネイチャー」の例として、「原始的(泥や暗闇)、不潔(煙、埃、排気)、恐ろしい(ガス、瓦礫)、制御不能(雑草、虫、鳩)」(p.22)のように形容される事物が挙げられている。

(印牧岳彦)

実在のデザイン | Reality Design

オムニチャンネルや OMO (Online Merges with Offline) で表現される通り、民間資本の空間(例えば商業空間)は近年、実空間で担保していた物事をオンライン空間へと移行させつつある。その結果、建築の価値を支えてきた「空間」という概念は、民間資本を端に「建築の存在意義としての役割」を失いつつあり、「そもそも建築はなぜ必要か? オンライン空間では果たせない価値とは?」という問いにデザインで応える、つまり建築の実在を形作る必要に迫られつつある。以下にその端を成す2つの概念を並べる。

[事業性] 建築がどのような経済的循環に依存し、その一端を担うか、そしてその依存関係はどの程度の持続可能性があるかを示す概念。

[環境性] 建築がどのような自然循環に依存し、その一端を担うか、そしてその依存関係はどの程度の持続可能性があるかを示す概念。

事業性も環境性をデザインの「どの過程」で取り扱い、「どの指標」を選択し、「指標をどのように」判断するかによって、デザインが描く建築の実在は変化する。つまり、絶対的な合理性が存在しない、一意に決まらない実在のデザインに、今後の建築の姿がある。

(西倉美祝)

循環 | Circulation

事物の循環、価値の循環、仕事の循環、経済の循環、記憶の循環、いろいろな循環が世の中にはあると思いますが、行って帰ってくる、送ったものが別のものになって戻ってくる、ここにあるものを別の場所へ移動していくとか、そういった循環系をいかに多層的かつ物理的にデザイン・設計・実装していくことができるのか、それが問われている気がします。循環がない限り、倫理や責任といったものも本質的には発生しません。近代は循環を壊し不可視化していくことで、社会システムを成立させてきた側面があると思うのですが、どうもそういったやり方に限界が迫っているということが、概念的・知的レベルではなく生活実感から切実に感じられるようになってきました。様々な循環系が交錯する結節点に建築物を生み出し、循環系そのものを能動的にデザインしていくような、そういう建築が求められているのではないのでしょうか。

(連勇太郎)

情感性 | Emotional engagement

Zoom 会議に出席することが日常になった。会議から会議へ移動を伴わずどこからでもボタンひとつで参加できるオンライン空間の手軽さが魅力だ。しかし、モニター越しの表情では感情の機微を読み取ることができないもどかしさや、退室ボタンひとつで場面が切り替わり現実に引き戻される瞬間の白々しさ、会議後の雑談や飲み会がない物足らなさも同時に感じており、オフライン空間でのコミュニケーションの価値を再認識している。オンライン空間の定着は、機能（プログラム）と空間（プラン）の対応関係がなくても最低限のアクティビティが成立し得ることを示したが、オンライン空間では担えない他者と時間・空間を共有している際に醸成される感覚（＝情感性）をいかに空間に定位させリアル空間の価値を空間化できるか、これからの建築の課題だろう。

（宮原真美子）

職住隣接 | Living in parallel with Working

コロナ禍を経て目に見えて変化したことのひとつが、住まうことと働くことの関係性であろう。テレワークの推進に伴い、自宅と職場の空間的距離は消失し、スマートフォンやタブレットの普及で外出時であっても容易に相互アクセスが可能となった。住まうことと働くことは意識の中でのみ境界線の存在する、いわば隣接した行為へと変化した。

都心-郊外間の通勤が当たり前となった現代の都市構造において、自宅と職場が空間的・時間的に近いことを職住近接と呼ぶが、ここではそのような相対的な観点ではなく、個々人に生じる先述したような絶対的な変化を指して「職住隣接」と定義する。ここには新たな自由と不自由が同時に内在する。建築あるいは都市のありように何らかの影響を及ぼすと考えられるが、実空間として構造化し得るものかはまだ分からない。

（西村達矢）

西洋建築史 | History of Western Architecture

先史時代より 20 世紀後半までの、旧 EU 圏を主とする建造物および、それらに関するドローイングや文字史料を扱う歴史研究分野。21 世紀前半、他の歴史学分野におけるグローバル・ヒストリーの隆盛とともに他地域の建築史と統合され「世界建築史」に名称変更、さらに「日本建築史」と統合され「建築史」の一部を構成した。しかしコロナ禍による実地研究の制限、不要論の高まり等の要因により研究者数は急速に減少。その後書籍等情報の輸出入が禁じられ、日本語を公用語とする地域の大学では同分野の講座は消滅し現在に至る（現在の「建築史」は旧「日本建築史」に相当）。「偉大なる解体」より、近年にわかにその必要性が議論されはじめた。（2054.09）

（江本弘）

世界 | World

1年くらい前から建築を考えると、今私たちはどんな世界を作ろうとしているのだろう、と考えるようになった。空間とか構造とか具体的なものを作りながら、本当は、新しい世界を作っている。または、今ある世界に別の世界を描き加えている。絵の上に一滴の色水を垂らすように。またはフィルターをかざすように。そして描き変えているというよりは、増やしている。世界を増やしている。または、無数に散らばる小さな世界同士を結び直している。そして時々奥に埋もれた世界を引っ張り出しては、これはなんだろうか、とそこに置いてみたりもしている。

同じ場所でも同じ空間でも、人それぞれ違った見方をする。そこには別々の世界が存在している。どの点とどの点を繋ぐか。それが世界の分かれ目でもある。世界は目に見えるものだけでなく、その人の信じているものが加わる。だから違って見える。それが世界の始まりでもある。なんとも取り留めがない話になるのだが、それでも私たちはこの無数に存在する世界を面白がり、また飽き飽きして、新たな世界を目指そうとしている。そのように建築を作ってみようと考えている。

(山田紗子)

ソーシャル・テクトニクス | Social Tectonics

素材や物質の接合からなる構造を示すテクトニクスという言葉に、ソーシャルという接頭語をつけた造語。状況がめくめく変化する現代において、敷地に作用する社会的な力を観察し、均衡させ、建築を作る目的や前提条件からデザインし直すことを示す。近代社会の中では建築に関わる力のベクトルは、生産性や効率性に向かった。建築や土地は細分化され扱いやすくなり、日本は戦後、急速な復興を成し遂げたとも言えるが、同時に人や資源が関係づく機会が奪われてきたことによる問題が、今日至るところで表出している。ソーシャル・テクトニクスの建築は、こうした状況を編み直し、寛容で開かれた空間が生まれるバランスを探ろうとする態度である。

(ツバメアーキテクト)

滞遊 | Sojourn

人類が遊動の時代に入ったと言われる最中、COVID-19により突如、わたしたちの動きは止まった。観光はもちろん、職住間の移動さえもままならず、移動の自由を奪われたのである。しかし、その反動として、多くの人々に、自身が滞る場を意識するきっかけを与えたのではないだろうか。

その意識は、定住する家だけでなく、家の内にある家具や生活用品など、わたしたちが日常的に滞る空間を支えるもの全てに向けられる。この家は心地よい空間か、無意識に使っている道具はこれでもよかったのか、住み心地や使い心地という消費の対価を意識したはずだ。

移動の自由が徐々に緩和される中、滞遊の意識は家の内側でなく外へと、スケールを縦断していく。家から公園、公共施設、そして街へ。筆者が大阪にある図書館を撮影した際、開館時刻と同時に入館し、自身のお気に入りの場を確保して読書に勤しむ人々がいた。一律の読書スペースでなく、光や造作によってつくられる固有の場だからこそ、人々は場の選択をより意識する。建築と対峙するわたしたち人間が、制約された移動の対価として、滞遊したい場＝建築をより希求するようになったのではないだろうか。

(関拓弥)

※『建築設計』掲載時は写真も収録予定

中景 | Middle landscape

遠景、近景の間にある中景は、風景の中の相対的な領域である。現代の都市空間は、近景あるいは遠景に焦点を集中するあまり、中景への意識が失われている。中景がなければ遠近が連続する大きな「風景」は成立しない。例えば、歴史的な町並みとして人々に愛されるような空間は、その土地の自然と調和し、遠近の間に溶け込むスケール感が創出されている。中景の喪失は自然と人工の対立ではなく、風景を眼差す社会的な価値観の問題である。

コロナ禍は我々の行動を強制的に変え、身近な風景や空間に対する意識変容をもたらした。また、近年洪水や風倒木、土砂崩れといった自然災害が頻発しており、力で抑えつけるだけでは根本的解決が難しい難問としてたち現れてきた。こうした出来事は、われわれの時代がまだ制御可能な事象と制御不能な現象の狭間にあることを再認識させる。社会を駆動する価値観がゆらいだ時代において、建築という行為は広く瞬間的な共感をあつめるメディアとなるよりも、小さくても社会の価値に関する議論を可能とする土台を築いていくべきだろう。

中景の喪失は風景の喪失を意味する。中景への眼差しは、空間の表層として風景を取り扱うのではない。個別具体的場所を扱う建築にとって、小さな社会の議論のハブとなる場をつくるテーマである。
(堀越優希)

※『建築設計』掲載時はドローイングも収録予定

超自然主義 | Hyper Naturalism

人間中心主義ではなく、自然中心主義でもなく、テクノロジーによって人間と自然との新しい関係を構築する立場として「超自然主義」という言葉を定義する。人類はかつて自然のなかで生活し、自然から学ぶことで文明を発展させてきた。そして人新世の時代において、人間中心主義の結果として自身が生きる環境への破壊を止められずにいる。そこで極端な自然保護に向かうのではなく、自然と人間が高度に共生し、テクノロジーによって自然現象を拡張させ、自然との新しい関係をめざす立場が「超自然主義」である。環境、エネルギー、建築、テクノロジー、アートなどの分野において、自然のエネルギーや法則性を応用し、新しい自然や生命のように動的な環境やオブジェクトを創造することをめざす。

例えば「超自然主義」の建築は三つの要素で構成される。

1. 建築が生命のように代謝し、変化していくための Adaptability を備える。
2. 身体を触発する自然の形態や現象からパフォーマティブに設計された Elementality を備える。
3. 形態の成り立ちと素材から生み出される固有の物語を紡ぐ Individuality を備える。

自然界の形態や現象を情報処理によって拡張し、ロボティクスなどのテクノロジーによって、建築は生命のような存在に昇華される。自然と人間が高度に融合し共生する「超自然主義」の思想によって、未来の建築を描けるのではないかと考えている。

(浜田晶則)

※『建築設計』掲載時は写真も収録予定

手触り | touch

モノの表面の凸凹やテクスチャー。2010年代にはアンサンブルスタジオやアンネ・ホルトロップといった素材やランドスケープから生まれる偶発的なテクスチャーや形態による建築がいくつか出てきた中で、社会ではSDGsといった持続可能な建築が求められ、有機物や自然素材を使用した建築がでてきている。一方、素材の手触りは触るや撫でるや眺めるといったアクティビティよりも小さなスケールの人間の行為を生み出す。そして触ることや撫でることによって素材や部分を観察し発見するような都市、まるで自然の中で花や虫を発見して愛でるような愛される都市になっていく。建築形態だけでなく、建築の素材もアフォーダンスとなる。

(小林章太)

※『建築設計』掲載時は補足テキストも収録予定

統合芸術 | Integration

20年代の建築は空間芸術から「統合芸術」への転換期となるように思う。私達は建築を「個々の素材間に関係性を与え統合し、意味を構築する行為」と考えているが、一方で現代において建築家が素材として捉えるべき諸要素は急速に多様化しており、人や組織、技術や環境、流行や文化、その他有象無象の、私達が生きる世界のあらゆる事象が計画を行う上で重要な要素、つまりは素材となり立ち現れる。

かつての先人が、無数の石を統合し1つのアーチという意味を持つ構築物を創造した、その想像力に建築行為のひとつの本質が在るならば、この加速的に発展する現代において建築家に社会が求める能力は、美しい空間を創造する能力に留まらず、物質・非物質の垣根なく素材を統合する想像力となるであろう。

(PAN- PROJECTS)

閉じられた家 | closed-up house

筆者はベトナム南部のホーチミン市に住んで10年になるが、奇妙な二項対立を目の当たりにしている。熱帯性気候の下では、日中の大半を庇下の半外部空間で過ごすのが伝統的に好まれるが、しかし／ゆえに、当地の施主は「閉じた家」を新たに求める傾向が見られる。これは、高気密住宅が一般化した日本において、しかし／ゆえに、建築家の設計が「開かれた家」を旨とする傾向があることと、対照的である。「開かれた」という言葉は、「元々は閉じるもの」というニュアンスを内包しているが、with コロナの20年代には、「閉じられた家」という言葉によって、単なる唯物論的な「閉じた家」とは異なり、常に「開かれる」可能性を留保した現象学的なアプローチが示唆されるかもしれない。

(西島光輔)

トランスローカル | Translocal or Translocality

建設プロジェクトにおいて、空間が変貌するのは果たして、そのプロジェクト敷地だけなのだろうか？

「トランスローカル」という語は、離れた場所の間における国境に影響を受けない関係を示す語である。1995年に人類学者である Appadurai らがこの語を定義して以降、加速するグローバル化を背景に移民研究を中心として使用が広がったようであるが、建築の分野においても近年になって注目を集めている(*1)。出稼ぎ労働者によるメキシコでの独特な住宅地形成や、ニューヨークにある公園の建築素材の採集地の変化などが次々と描かれるようになったことはその一端である(*2)。私が香港で行った聞き込み調査からも、フィリピン人の住み込み家政婦さんのコミュニティが香港でのイベントなどの活動を通して、村の建設プロジェクトに貢献していることが分かった(画像)。こうした遠く離れた地との関係を捉える眼差しは、グローバル化が再考される現在、そして移民が増加傾向にある日本において、私たちが持つべき視点の1つなのではないだろうか。

1: Arjun Appadurai による「The Production of Locality」

2: Who Builds Your Architecture? (WBAYA?), Sarah Lynn Lopez による「The Remittance Landscape」, Jane Hutton による「Reciprocal Landscape」

(富永秀俊)

※『建築設計』掲載時は補足説明と写真も収録予定

パブリベート | pub-rivate

パンデミックによる移動と集いの制限は、屋上やコワーキングスペースの活用を促しました。一方で、子ども食堂、多言語カフェ、マギーズセンターなどの多文化共生や孤立を支援するボランティアな活動の場とインクルーシブな居場所を一時的に奪い、それらの価値が再考されています。また、近年のキャンプ場、市民農園、スケートパークの新設、あるいは遊休資産や商店街など都市の余剰空間の公共的転用は、シェアと共感の時代性を代弁しています。これらの公/私に分類し難い場所や空間を「パブリベート」と名付けました。類義語にコモンがありますが、パブリベートは登録制・共同管理は前提としません。パブリベートな場は、近しい価値観や属性の人々を受容する場であり、機能が多重で曖昧な空間を含みます。

(王聖美)

ヒンターランドスケープ | hinter-land-scape

後背地=ヒンターランドが再解釈されている。都市周辺にありその経済や流通における影響範囲として解釈されてきた地域は、都市/田舎の二分法において捉え難く、都市再生と地方創生の間に横たわる巨大な領域である。ニール・ブレナーらは都市ではなく「都市化」に着目し、非都市と定義される領域がいかにか都市の形成過程において必要な外部として組み込まれているかを明らかにする。自然資源とともにある地域をインフラが覆い、グローバル企業の流通倉庫が立地する郊外の現象を、「都市化=都市という空間単位の拡張」という物語の内側にいる限り私たちはうまく記述できない。

2020年代は非都市を中心に据える視座から、後背地の風景(ヒンターランド・スケープ)の捉え難さと向き合う建築的实践を通して、非都市なるものの再概念化が求められる。そしてそれは、後景化しつつあるコモンスとしてのランドスケープ(ヒンター・ランドスケープ)の回復に差し向けなければならない。

参考文献：『惑星都市理論』平田周、仙波希望編 2021

(伊藤孝仁)

フィールドワーク | Fieldwork

研究対象のある場所に自ら出向き、目視や実測、試料採取等により系統立てて調査を行うこと。古文書等の文献調査と補完関係にあるもので、考古学の黎明期から実践されている。ただしその手法は時代を通じて変化し、20世紀には炭素年代測定、試料の化学分析、写真測量などの新技術がフィールドワークを支えた。コンピューターシミュレーション、高精度デジタルスキャン等の技術が目覚ましい進展を見せている近年、フィールドワークも新たな局面に入るかもしれない。一方で石肌に素手で触れるような昔ながらの「泥くさい」作業は依然として不可欠であり続けるだろう。歴史研究のみならず、古い建物のリノベーションあるいは新築計画においても、事前調査(あるいは建設後のフォローアップ)が「フィールドワーク」の様相を呈することはあるだろう。

(嶋崎礼)

フェア | fair

情報や価値判断の非対称性が失われ透明化が加速を続ける時代。建築においても「フェアかどうか」に意識的になる日々がもうしばらく続き、やがて「フェア」は当然の価値観になる。フェアは二つの側面から建築をより好ましい方向に変えていく。まず、環境への想像力が増す。フェア・トレードやエシカル消費という概念が日用品において定着したように、建物の履歴を辿り職人や森林・河川、ひいては地球全体を意識した広域的で長期的にフェアな建築が問われるようになる。次に、当事者の関係性が融和する。発注者・利用者・施工者・設計者、地域住民や将来世代までもがフェアに創造を共にするが、それが建築の安易な民主化になるかどうかは、我々設計者がより強い未来の妄想を提示できるかにかかっている。

(黒川彰)

不在の想像 | Imagination for absence

船着場にはどんな船もやって来る可能性がある。船が入ると、港はわっと活気づき、風景が一変する。広い岸壁、岸壁沿いの建物、背後の広場なんかが、船に鼓舞され輝き出す。そして、その船を待っていた人がいる。いま建築はそんな船のようにありたいと思う。いつしか成熟社会と言われてそう錯覚し、モノも空間も余りだしたことに気を取られ、かえって肝心の不足や不在が見えづらくなっていたか。今あるものから少し引いて不在を感じることに、今ないものを想像することに注力したい。船が来ることを忘れてしまった船着き場の活用方法を考えるまえに、もう一度、来なくなった船のほうを想像し、新しいかたちを与えてみたい、とでも言おうか。

(宮城島崇人)

フルディテール | full detail

モダニズムが実践してきたシンプルで抽象的で高品質(ハイディテール)な建築に対する、コンピュータ技術において可能になるであろう、複雑で具象性の高い建築のスタイル。もともとはプラモデル等に用いられるディテールをより多く再現することを意味する言葉。2010年代に、「機動戦士ガンダム」の実物大立像ができた頃から、アニメとは異なったパーツ目地やビス穴、設備ハッチやジョイント、注意書きサインといった、デザインでは旧来隠すべきだったノイズもデザイン要素として配列する複雑なデザインが徐々に美学として受け止められてきている。純粋な建築では家具やサイン等、建築に付随するモノにも純粋性や質を求められるが、複雑性の高い建築ではモノの複雑性や量が求められる。それはまたモノのノイズを許容する生活感のある建築とも言える。

(小林章太)

※『建築設計』掲載時は補足テキストと写真も収録予定

母性原理的建築 | architecture on maternal principle

本来その場所にある地形的・物理的特徴を手掛かりにした設計手法により構築された建築。例えば平場を確保しやすい緩やかな傾斜地には棚田がつくられてきたように、あるいは小山や谷間のような急傾斜地では果樹の段々畑が形成されてきたように、本来人々は地形に抗うことなくその場の持つ適正を的確に見定めて土地ごとの必然的な場のあり方を模索してきた歴史があり、その様々な痕跡が現在の人々の営みや景観形成に繋がっている。環境工学の分野において樋口忠彦が『母性原理』と『父性原理』という言葉を用いて日本の景観や日本人の自然観について言及しており、前者は“自然に依存し、それと一体化していくという態度”であり、対して後者は“自然を切り拓き、自然を人工化していくという態度”であるとしている(※)。この言説を建築に置き換え、地形と応答しながら棚田や果樹園を形成するような態度でつくる建築を「母性原理的建築」と言語化し、様々な形で開発が行われてきた後の現代において本来そこにあるべき場、そして建築を思考する視座のひとつとして提示したい。

※「日本の景観」(樋口忠彦著 筑摩書房 1993年)第一章 日本人の自然観と風景観

(佐々木翔)

ホモ・プライベートウス | Homo privatus

「自由」を自らの意思で獲得するのではなく与えられた人類のこと。

かつて人類は身を守るために社会を形成し、高度化させた。裸だったヒトが動物の皮を身にまとい、屋根をかけたのと同じく。その社会は血縁・地縁・性別・宗教・職業・思想のネットワークで成立してきた。

21世紀初頭の急速な情報・交通の技術革新によってグローバル化が進み、それまでの社会は不可逆に解体され、逆に個人単位での多様な価値観が認められるようになった。社会を成立させていたものをいずれも「しがらみ」として切り捨て、私たちは自由を手に入れた。いや、身ぐるみをはがされた。自由の野原に裸一貫で放り出されたヒトはどうするか。おそらく、もう一度皮を身にまとい、屋根をかけようとするはずだ。つまり、私たちはもう一度不自由を欲するはずだ。しかし皮も屋根も、朽ちたのでまた一から作らねばならない。

(林浩平)

※『建築設計』掲載時は補足テキストと図も収録予定

森のキツツキ | Woodpecker in the Forest

生態系へ広く影響を生む種のことを、「キーストーン種」といいます。

例えば森で、傷のついた木肌に虫が住み着き、その虫を目当てにキツツキが木をついばみます。大きくなった穴をモモンガが住処に見立て、時間をかけて木を使い倒します。そうして木の老朽化が進み、やがて倒木すると、周りの木々や地被植物などに光が届き、森の生態系が維持されていきます。

木肌に生まれた小さな傷や、キツツキによる小さなきっかけから出発し、さまざまな登場人物の目的が連鎖して、大きな森の循環になっていくこと、私たちはこの流れを建築のプロジェクトの文脈に重ねて考えています。

それぞれの事物の目的や動きが、長い時間軸のなかで大きく豊かな連なりをうむ、その結節点となるような建築を考えたいと思っています。

(冨永美保)

やわらかくあること | Softness in Architecture

建築は、身体を包むような衣服のように、どこにでも持ち運べる旅行鞆のように、強い日差しから日陰をつくる樹木ようになっていくだろう。原始的な建築は、きっとそんなものだった。しかし、気づくと、かたい柱、かたい決まり事、かたい関係性。建築は多くの「かたさ」にいと簡単に絡みとれてしまっている。かたちにとらわれない、やわらかい建築は、生活様式を、コミュニティを、都市のシーンを変えていく。そのために、建築家のこれまでの職能を疑い、異分野と交流し、テクノロジーを積極的に取り入れることが必要になる。2020年代は間違いなく、時代の転換点だ。建築がやわらかさを取り戻すことで、内から外へ、身の回りから環境へと視点が変化していく。

(クマタイチ)

ユマニチュード | humanitude

特に認知症高齢者に対するケアの技法および哲学。仏語で「人間らしさ」を意味し、出会いから別れまでのケアの手順が5つのステップで示される。^{*1}

いつの時代も、ヒトは「人間とは何か」について考えてきた。2020年代にいたり、気候危機やパンデミックなどの多くの新たな兆しは、この問いへの再考を促す。それらはいずれも人間中心主義への反省に関わるものだ。であれば、動物や自然との関係だけでなく、ヒトとウィルス、ヒトとモノ、あるいはヒトと建築の関係をも含めて考えるべきなのではないだろうか。

細馬宏通はユマニチュードの技術を「ケアの知恵であるばかりでなく、感覚や認知の異なる者どうしがつきあうための知恵」とあると言う。^{*2} 既存の主従関係によって人間存在を特権化するのではなく、他の生物のみならず事物との関わりまでも含めた人間らしさのあり方へと語義を広げることによって、新たな議論を開いていけるのではないだろうか。

^{*1} イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ『ユマニチュードという革命』(2016、誠文堂新光社)

^{*2} 細馬宏通『介護するからだ』「1 動きをつくる動き」p.57 (2016、医学書院)

(中島亮二)

溶域 | Dissolving boundaries/ dissolving elements

1. 物理的には存在するが、ヒトの意識に溶け込んでしまうことで知覚的にはその存在が希薄となる領域。その領域を構成する要素。なお物質的に透明であるとか質量的に軽いといった、透視図的な視覚や古典物理学による定義とは関係がない。不透明で重厚な要素であってもヒトの意識に溶けうる。
2. 既知の感覚や常識に依る、ヒトの認知からのすり抜け。記号性の利用による意識への溶解あるいは印象の変化。ヒトの個体ごとの経験に基づくトラウマ・デジャブや宗教・文化に依存するため、同一のものであっても受容される感覚には個体ごとにばらつきがある。
3. 国境、人種、性別を区分する境界が溶解しあいまいになること。

(三井嶺)

※『建築設計』掲載時は補足説明と写真も収録予定

呼継ぎ的空間 | Yobitsugi space

異なる層を重ね合わせるにより生じる新たな風景のこと。

古の茶人は、茶の湯道具の欠けをあるがままの姿として受け入れ、別の器の破片により繕うことで、それを新しい景色に見立て、破格の美として愛でたという。このような、傷をも歴史の一部とし、異なる時代の境界を浮き立たせつつも、新たな調和を生み出す、呼継ぎという器の修復技法は、近年における建築の保存再生のあり方と近似した価値を見出し得るのではないか。異なる時代の層を際立たせ、あるいは馴染ませ重ね合わせるにより、過去との連続性をはらんだ新たな空間を生じさせる。呼継ぎの技法にも通じる、二つの層を如何に重ね合わせるか、という歴史の重層性をデザインする行為により導かれた空間は、呼継ぎ的空間といえるであろう。

(浪松由子)

らしさ | mood, aura..

ある対象物(道具や街、人物など問わない)がもつ、あるいはある対象物から感じられる、言い得ることのできない雰囲気。また、対象物の見方によって、捉えられる雰囲気は様々であって良い。

「らしさ」は、共感を得るための道具ではないはずで、そんなに簡単にみつかるものでも、そして共有すべきものでもないと思う。建築家をはじめものをつくる人は、らしさを捉えることに長けている。らしさは抽象的な言葉だけで捉えるべきものではなく、対象物が持つスケールや素材、性質など様々なものの総体であり、それらを観察し、考察を深め、形にする術を作家はそれぞれに持っている。そのような仕事によって、ものをつくることは、世界を狭めることにならず、あらゆる価値観がここにあることを証明したり、新たな価値観を差し出すようなきっかけであるべきだ。

多様性という言葉が多く使われている昨今だが、そこでは顕著でわかりやすい見方が選ばれているだけで、それよりももっと多くの見方が存在していることを、私たちは心に留めておかなければならない。

(板坂留五)

リカーランス | Recurrence

デザインはいつも何かを意図してきた。例えば、アフォーダンスでは身の周りの環境に「生態学的情報」が含まれ、それが人の行為を特定すると言われてきた。しかし、行為や使い方を明確に特定することは、今の時代に相応しいのだろうか。これからは、行為を特定するデザインではなく、行為を誘発するデザインが必要である。つまり、行為を誘発するきっかけだけが、建築や都市のデザインに内在し、誘発される行為には、個の感性や時代の状況などが反映される。そして、刻々と変化する状況を促し、作り出すのだ。きっかけだけが内在する建築は、循環していく環境を育み得る。そのような原理に「Recurrence」という言葉を与えたい。

(津川恵理)

臨床の建築 | Clinical architecture

都市・建築空間において、人との距離や接触についてこれまでになく過敏で、都市や生活の在り方を人類が探る今。「臨床」の建築を考えてみたい。まずそこには治療と予防、その先に日常の健康を維持するため、新たなライフスキルを実装した建築がある。そして、移動と接触が制限された社会がより依存する情報空間に置き換え不能なもの、コミュニケーションが浮かび上がる。他者と対面・対話し、場所に触れ、オンサイトで事物を身体が発見すること。それらにプライオリティーのある臨床の建築がある。同時に臨床には、ユニバーサルで標準モデルを想定した客観的デザインに代わる、人間のもつ多様性・個別性や、一人の中にも在る様態・様相の変化に寄り添い、意識・知覚に注目して人間の主体性・能動性を回復する建築も想像できる。様々なアクチュアリティを鮮やかに束ねる臨床の建築である。

(稲垣淳哉)

※『建築設計』掲載時は補足テキストも収録予定

倫理的建築 | Ethical Architecture

今の私達の価値観に比して、必要以上に丁寧に既存環境(新築であれば敷地、改修であれば既存建物)や施主、地域の声に耳を傾け、設計と施工に長い時間をかけ、地球環境の悪化を少しでも抑える努力をしている建築のことを、倫理的建築という。倫理的建築は人に優しく、同時に地球環境や生き物、あるいはモノにも優しい。また、竣工の一瞬を最大の価値に置かず、予め設計者に決められたコンセプトにも縛られない。今、此处、私が「空間」を「所有」する感覚よりも、今、此处、私にはまだ無い(在ったかもしれない)「時間」が「共有」される感覚を引き受けることをその存在価値とするからである。

(辻琢磨)

※『建築設計』掲載時は解説テキストも収録予定